

大丸呉服店

長谷川時雨

青空文庫

——老母のところから、次のような覚書をくれたので、「大丸」のことはもつと後にゆつくりと書くつもりだったが、折角の志ゆえそのまま記すことにした。

小伝馬町三丁目こでんまちようのうなぎやは（近三きんさん）明治廿四、五年ごろまでであったと思います。

大伝馬町四丁目（この一町とおだけ通はたご町）大丸呉服店にては一月一日表戸を半分おろして、店を大広間として金屏風きんびようぶを立てまわし、元旦がんとん一日は凡そおよ（そのころで三百人以

上）三、四百人の番頭、若者、小僧一同に大そうなごちそうが出る。お酒も出る。福引その他、実に一年中を一日に楽しませるので、近所の子供らも皆女中小僧をつれて遊びにゆき、羽根をつくやら、鞆まりなげ、楊弓ようぎゆうもあり踊りもあれば、三味線もあり、いろいろと楽しませ夕方帰りには、山ほど土産をそれぞれにくれました。

大丸の符牒ふちよう

（イエトモヲコルコトナシ）

とか聞いておりました。

朝は早くから小僧が「おきろよおきろよ。」と呼んで、見世みせ中十人ぐらいで、ぐるぐ

る起して廻りました。客がはいつてくると、帳場の者が——帳場に

甚四郎とか

才助とか大書した、三尺ばかりの紙札の下に、各めいめい自の横に、小さな帳場格子とかすすり硯をひかえて、ずっと並んで坐っています。客は名札を見て、気の合いそうな売手のところへと上つてゆきます。

女客なれば、クノイチクノイチという

男客なれば、ハツコウハツコウという

クノイチと言えば店中女客と思ひ、ハツコウといえは男客だと知ります。

不一のクノイチは不器量な女の事

不一のハツコウは嫌な男の事

ト一のクノイチはよき女人のこと

ト一のハツコウはよき男のこと

客の買物の金高によつて御馳走ごちそうがちがう。その符牒は、

お菓子なれば「きしるし」という。おそばなれば「とくいし」という。御飯なれば「ふしんかた」という。着さかななれば「またろ」という。またあい(着)かもしれません。

大門通り右側に、たはらや（田庄）呉服大問屋、大丸その他へおろし店。そのさきに市田、これも大問屋、市田の方は多く織ものと模様もの、上々品ばかり、人形町その他の呉服店へおろす。

大門通り左側は角からずつと金物店ばかり、この辺を通ると店々にならんでいる番頭若者らが、よき女子の時は煙草盆タバコぼんのはいふきを二ツ叩くたた。それをまた隣りの店で二ツたたき、つぎつぎに知らせるのです。大丸のまむこうに、大丸出入りの菓子や「かめや」あり、旅籠町はたごちよう通りに大丸とならんで大丸の糸店いとだなと扇店あふがあり、「みすや針店」のとなりが森田清翁きよわうという、これも出入りの菓子や。十月十九日べつたら市の日には店へ青竹にて手すりを拵こしらえ、客をはかつて紅白の切山椒きりさんしよを売りはじめます。たいした景気、極々よき風味なり。向側の「かめや」にても十九日にはやはり青竹にて手すりをこしらえ、柏餅かしわもちをその日ばかり売ります。エビス様の絵の団扇うちわを客にだしました。この家は神田小柳町からの大火で店蔵をおとして、主人が気が変になつて、四、五年の後店もなくなりました。とおりあぶらちよう

通油町とおりあぶらちようの大通りの向う側の横町は南新道、それとならんだ通りが大丸新道、この一丁は、大丸の土蔵の窓——裏側なのです——に金網が張ってあり、湯殿も、台所もみなおなじ。

以上、老母からの手紙は、辿たど々たどしい文ではあるが、大丸という大呉服店を通して、そのうらのお店たなものの奴隷生活がうつしだされている。一年に一度の、この目覚ましい慰安的な、解放したようでその実解放しない、人目を眩くらす華ま々しいやり方と、終りの方に書いてある、窓々の金網のことを見すごすことは出来ない。

あたしは震災の幾年か前、ある怪談会が吉原水道尻じりの引手茶屋ひきてぢややで催された時にいつて、裏の方から妓楼ぎろうの窓を見たことがある。そこにも金網が張つてあつた。娼妓しょうぎの逃亡を怖れてだといったが、それより幾年前、帝都の中央まんなかの日本橋に、しかも区内のめぬきで中心である土地ゆえ、日本国の中心といつてもよい場処の大呉服店に、そうした窓が、しかも一丁の半分以上をしめて金網が張りわたされていたという事実がある。それはあたしも子供心に知っていた。盗品をおそれるのだといったが、それならば台所の窓にまでしなくつてもよいはずである。外からの盗人おそを怖れたのではない。

理屈はやめて、大丸はその近所の者にとつて、何がなし目標点だつた。物珍らしい見物みものがあれば、みな大丸の角に集まってゆく。鉄道馬車がはじめて通つた時もそうなら、西洋人が来たとき騒いで駈附けるのも大丸であるし、お開帳の休憩もそこであつた。アンボンタ

ンが知らない時分の大丸は、神田から出た北風なからいの火事には、類焼やけるものとして、蔵くらの戸前とまえをうってしまふと店をすっかり空にし、裸ろうそくを立てならべておいたのだという、妙な、とんでもない巨大おおきな男おとこ店だなだった。

大丸はおおでんま大伝馬はたご旅籠町から大門通りへ折れまがつて裏まで通った、一丁の半分以上を敷地にして幾戸前かの蔵と店とで、糸いと店だなによつた方に広い土間があつた。表付きは明あけつづろげではなく、土蔵造りのところどころに間口があり、そのほかは上部だけ扉があがつて、下部は土で塗つてあつた。大戸の上げおろしが、あの広い間口では大変だったせいもあるうが、その中側が一軒以上ぐるとタタキになつてゐる土間だった。老母の覚書にもある通りの紙の名札が、高い欄間らんまから並べて張つてあつたが、それは店さきの畳からは、三間以上も奥の方だった。角の大黒柱を中にして、座りどころにも位置があるらしく、甚四郎、才助などと書いた両側に専属の小僧の名が、三ツも四ツも並べて書きつけてあつた。

店さきの諸所に、小切れをいれた箱が据すえてあつた。あたしの祖母は連合つれあいが呉服の御用商人であり、兄がやはり絹呉服の御用商であつた関係か、大丸とはゆかりがありげであつた。あたしたちがよい事をしたおりや、若い娘客に何か与えたくなつたおり、ちよいと曳ひ裾きずそのおつまをとつて出かけてゆくさきは、いつも大丸だった。彼女がはいつてゆくと、

誰かしら顔を見た番頭が立つて来て、小切れ箱から絞しぼりばなしをつまみ出した。赤いのや、濃い紫や、浅黄のが取りだされて八釜やかましぼりとか、麻の葉とか、つのしぼりとか、赤の黄上げのだから、種々な鹿かの子こ絞りにも名のあるのをあたしは知った。祖母はその二、三種を、手ごろな有りぎれのまま、ザクリと手にさげて帰る——あたしたちの目はかがやいたものである。その裂きれ地が、もらった嬢さんたちの結綿島田ゆいわたしまだにもかけられ、あたしたちの着物にもじゅばんの襟にもかけられた。帯にもなった。

ある日、大丸に大変な人だかりがした。西洋人とうじんが買物に来ているのだという。いってみると、太い赤い頸くびすじに金茶色の毛がモジャモジャしている、眼鏡をかけた男と、キチキチした、黒つぼく光る上衣うわぎに、腰の方だけ沢山ひだを重ねて広がった服をきている、意地のわるそうに尖とがった、茶色の眼の、狐きつねのような女が、ボンネットをかぶって、見物にかけたものを睨ねめかえしていた。小さくて痩やせている犬をつれていた。子供の目にも、今思いだしても、決して上品なよい人柄とは思えなかつたので、ものめずらしくはあつたが、なんとなくこの西洋人とうじんを軽蔑した。その時分、黒いやせた、茶色の斑点が額にコブのようにある洋犬いぬをカメと呼んだ。だが、そのおり人々が口にしたカメは、連れていた小犬ではなく、どうもその女の方をさして呼んでいた様子だった。西洋人けとうじんも傲慢ごうまんだった。泥靴の

ままで畳の上へ上つていった。

お正月元日は、大戸の上がとどころ明けてあつた。お茶番のいる広い土間の入口のくぐ潜り戸をはいつてゆくと、平日いつもに増してお茶番の銅壺どうこは煮にえたち、二つの茶釜ちやがまからは湯気がたつてどこもピカピカ光つていた。すぐ前の別座になつてゐる、大格子の中が大番頭や、支配人や、一番番頭のいるところだつた。頭の上の神棚にもお飾りが出来てお燈とうみよう明が赤くついている。その前の大飾りは素張すばらしい鏡餅かがみもちが据えてあつた。海老えびもピンとはねていた。

夜があけるとすぐ羽根の音である。いつも番頭の並んでゐる区画に、ずっと金屏風が——立派な画のものもある——が廻めぐらされて、そのうち側で羽根をつくのだが、それは朝のうちだけのことで近所の女たちが、見物に出かける時分には、屏風の前の方へ出てきている。小僧も、若者も、番頭も入いりまじ交りまじり、ゆかりのある家の女供や近所の者が、風はなし、自由ゆづりに広しるので遊びにゆくので、とても壯観な位に、しまいには屏風もとりはらつてしまつての追羽根になる。騒々しい位の羽根の音だ。

糸店いとだなによつた方に舞台があつて、立派な衣装をつけた芝居を番頭たちが演やつてゐる。そこも見物はギツシリだ。だがこうした足どめ策をしても、やっぱり外に忍び出るものは

多かつた。

この広い店、中央の羽根つき場になる個所はずっと天井が高く、明りあかりりになつていて廻りだけにぐるりと二階がある。お客を接待する座敷の方は立派できれいだが、それでも薄暗かつた。なぜなら、中央の広場の方の手すりから光りはくるが、肝心な表通りへ面した方には、たしか窓もない盲目めくらだて建だつたからである。窓があつたとしても、小さなので、細かい、格子でもあつたのであろう。そこから明りがさしたようには覚えていない。床の間には、小谷さんの娘さんがさした、大きな松竹梅の生花が飾つてあつた。合宿室も、そうした二階のそこらにあつた。台所に近い蔵前には、各自の姓名なまえをかけた雑煮ぞうにほし箸の袋が、板張りに添つて細い板割で造つた、幾筋かの箸たての溝に、ずらりと並んではさんであつた。

ある番頭が、羽根を突いていて、暑くなつたので糸織の羽織をぬいで小僧に渡した。羽織の裏は大きな帆かけ船があつて七福神が乗っているのだった。宝と書いてある帆は縹しゆすで盛上つていた。帆きんしづなの金糸をひくと、帆がひつくりかえつて——アンポンタンは多分宝ものが沢山積んであるものだろうときめていたからよく見もしないで、蜜柑みかんまきのみかんを拾うのに無中だったが、その船のうちこそ、彼らが給料をのこらずかけたといつても

よい、手のこんだ不思議な細工だということであった。禁欲された彼らが、不自然な生活は哀れなものであったろう。誰も彼も胃病患者に違いない——もしくは十二支腸虫患者か、みんな生気のない、青びようたんみたいだった。

だが、不思議に元日に間違いはなく——もつとも大僧より小僧の方の悦びよろこの日だったのだ。大きいものはもう昼から夕方になると、段々にかげをかくしてしまった。そして無邪気な、近所のものがのさばりかえった。

大丸の神棚の下に納まっている大番頭たちは、みんな近くに家を持っていた。蔵附きの中流以上の構えである。面白いことに養子制度で、どの家でも細君が家附きの娘だということの中から目ぼしい若者を養子に抜いてゆくのであろう。だが、大番頭の息子も小僧と一緒に終業するのかどうかそれは知らない。あたしの知っている大番頭さんの娘は、おあぐさんにおたをさんという姉妹だった。そのお母さんも、そのまたお母さんも家附きの娘だ。とても丁寧な人たちで——一体にどこの家の女の人もそうだったが——お風呂であうと板の間でも両手について、寒いのに何時いつまでも御挨拶ごあいさつがある。時候が冷えますということから、朝晩めつきり寒くなつたこと、皆様おかわりが無いということ、先日は何々

して何々がなにとやらと、とても閑談的なのである。

おあぐさんという名は妙だが、下町ではよく阿久利という名をつける。大概大事な子で、子育ての悪い家ですつける者だという。このおあぐさんが、年寄り連の理想的な娘なので、あの通りにお優しく、しとやかな声を出さなければいけないと、よく引合ひきあいに出して叱しかられた。おあぐさんの家は向う新道の角から二軒目で、二階と塀を通りにもち、玄関はわざとのように、敷石のある露路に古い磨いた格子戸をもっていた。冬は朝早くから寒かんざらいといつて長唄ながうたのおさらいをする。午後おひるつからもする。三味線の音がよく聞えるので、ソラおあぐさんはお浚さらいだと私も三味線をもたされるので、その方角は鬼門だった。

その他、大丸直属の仕立屋や縫箔屋ぬいはくやが幾軒かあった。店蔵かみがたづくりの、上方風かみがたの荏柄えがらぬりの格子窓で、入口の格子戸の前に長い暖簾のれんが下っていた。帯ばかりくける家もあった。天水桶てんすいおけがあつて——桶といつても上に乗っている手桶だけ木で、下の天水桶は鑄鉄いものが多かった。かなりいい金魚が飼つてあるので、金網を張つてあるのもあった。その一軒の大仕立屋におしゆんさんという美しい娘がいて、上方風の「油屋お染」のような濃艶のうえんなおつくりしていた。面長おもながな下しもぶくれな顔に黒い鬢びんを張つて、おしどりに結つて緋鹿ひかの子この上を金紗きんしゃでむすんでいた。つまみの薬玉くすだまの簪かんざしの長い房が頬の横でゆれて、羽織をきな

いで、小さい前かけ位な友禪ゆうぜんちりめんの小ぶとんに、緋ぢりめんの紐ひものついたのを背にあてて、紐を胸でむすんでさげていた。その女ひとが狝ちんを抱いて、夕方遊びに出るのを見るのがあたしは大好きだった。

大丸の小僧はみんな馬鹿なのかと思ったことがある。大きな姿なりをして、頭髪をおかっぱのようにして、中には胸にあぶらやのような茶色の切れをかけていた——お茶盆をもって、アーアーと節をつけて、店のはなつききを行ったり来たりしていたからだ。アーアーというのは、おほいりという事なのだといったが、眺めていると好い気持ちではなかった。

大丸と向いあった角に仏具屋があつて、その横に交番があつたが、ある日引っこしをした。人夫が交番へ丸太ン棒を通して担いでいってしまったので吃驚びつくりした。でも交番がとれて四ツ角が広くなつたのは具合がよかつた。何事もみんな物珍らしいことはこの四ツ角に立つて見物する最上の場所だったから——

住吉踊すみよしおどり

の一隊が来てかつぽれを踊ると、大きな渦になつて見物がとりまいた。梅うめぼ

坊主うずの連中は夕方によつてくるのでよく人が寄つた。お正月の出初でぞめも賑やかだった。下の町の纏まとは大概あつまつて、ずっと大伝馬町から油町通りに列をひいて揃はしごつて梯子はしご乗りをする。それよりも大丸の年中行事は、諸国から出開帳でがいちようの諸仏、諸神のお小休みだ。譬いわは嵯さ

峨のお釈迦様が両国の回向院でお開帳だとか、信濃の善光寺様の出開帳だとか——そのうちでも日蓮宗は華やかだった。小伝馬上町に身延山の出張寺はあったが、本所の法恩寺へお開帳はもつていった。そのかえりが一日上町のお祖師様へ立寄るのだった。大万燈や、髭題目を書いた。ひぢりめんのくくり猿をつけた大中ちりめんの大旗や、出車もでた。縮緬ゆかたのお揃いもある、しぼりの揃いもある。派手を競い、華美をつくし、見ているのも足労れるほど沢山、目印を各講中ごとに押立てくるが、そのどれもがかわらないのは、氣狂いかと思うほど無中で太鼓を叩いてお題目をど鳴ることだった。花笠を背にしている一連もあれば、男女とも手拭を吉原かぶりにしているものもある。胸で小意気に結んでいるものもある。

その人たちが——無数な人たちが、一時大丸の店を一ぱいに占領してお中食をする。それから一休みして順繰りにくりだす。先頭が両国橋へかかる時分に、まだ中頃のが足揃いをしている。御本体が出て、お茶湯が一番最後に出てゆく。

ある日もアンポンタンはおまつちやんと四ツ角で、その大人の、目覚しい狂奔を見物していた。すると、帝釈様の剣に錦地の南無妙法蓮華經の幟をたてた出車の上から声をかけたものがある。

「ヤツちゃん、手を出して——はやく乗った、乗った。」

学校友達のお古帳面屋のお金ちゃんのお父さんだった。その人は背の高いキレイな人で、清元きよもとのお俊とらいさの時に山台やまだいに乗って、二、三人で唄うたっていたことがあって、みんなにオシイー、オシイー、とほめられた人だった。その時はじめて清元とは首を振って唄うたつてしまふと、おいしいーと長くひっぱつてほめられるものだということを知ったのだった。金坊のお父さんは、講中の世話役だから橘たちばなのもようのお揃そろいの浴衣ゆかたを着て、茶博多ちやはかたの帯をしめて、お尻しりをはしよつて、白足袋の足袋はだして、吉原かむりにして襟えりに講中の団扇うちわをさしていた。

あたしたちは吃驚びっくりしているうちに、見物が抱上げて出車だしの上の人たちの手に渡してくれた。無論上にはお金坊もおよつちゃんもいた。妙に晴がましかつたが、押上げてくれた人たちが不思議とほころしげにニタニタ笑っていた。日傘ほどの大きな団扇で誰かが煽あおいでくれる——お金ちゃんのお父さんは首から拍子木ひょうしぎをかけていて、止るところや何かで鳴らした。火の用心と赤く書いてある腰にさげた袋から煙草タバコを出して吸った。行列が深川の高橋にかかった時、あたしは橋の上から後の方を見渡して、誰もほかに知ったものはない、何処どこにつれてつてしまわれるのかとホロホロして帰してくれとせがんだが、もう仕用

がないときかれなかつた。

憲法発布の時、大丸では舞楽の「蘭陵王」の飾りものをした。これは日本橋油町の鉾出車にあつたもので、神田田町の「猿」、京橋の「閑古鳥」と並んで、有名な日本橋の「竜神」とは違うが維新の時国外へ流れ出てしまった、この有名な蘭陵王の面は、アメリカにあるとかいふた。大丸では当時の町総代が京都まで行って織らせた、蘭陵王の着用の裂れ地の価値を知っている、それを造つて飾つた。その日何処でもしたという酒樽のいくつか、大丸の前にもかがみが抜いて柄酌がつけて出された。

油町側では憲法発布の由来というような、通俗的な演説会といったふうなものを催した。そんな時にこそ大丸が会場であるはずなのだが、町内の関係で油町の加賀吉という大店で開かれた。そこはたしか山岸荷葉氏——紅葉門下で、少年の頃は天才書家として知られていた人である——の生家で、眼鏡や何かの間屋だった。年の暮のえびす講などに忘年芝居を催したりする派手な店で北新道のあたしの家の並びの荷蔵に、荷車で芝居の道具を出しに來たりしていた。その店が会場となり演説の卓がおかれた。

そんな事はお江戸開闢以来のことと見えて、アンポンタンの幼い頃にも忘れない不思議な光景を残している。まず、弁者は、その近辺でも当時の新智識と目されたものと見

えて洋服を着ていることの多いあたしの父であった。洋服が新時代の目標であったと見える。尤も、官員さんの一人もいない土地であつて見れば、私の父がハイカラだったのかも知れない。明治十二年官許代だいげんにん言人、今から見ればとても古くさい名だが、十二人とかしかなかつた最初の仲間の一人であつたときいている。

前の日まで、憲法ということの講釈を、若い旦那だんなたちの幾人かが熱心に聴きにきた。その人たちが世話役でもあつたのであろう。その当日も机をはこんだり、会場のしつらえを問合せに來たりして、いよいよ午後六時前となると、傍聴フアンの動作研究会というような集りになつた。どうもまだノーノー、ヒヤヒヤが分はつきり明しないという訳なのだった。書生たちまでが一緒に並んでその稽古をやる。父はハイカラな礼服だが、朝からの祝いわいざけ酒に、私が大きらいな赤黒い色になつている。手はずしてあつた個かしょ処で、合図を忘れるので、フアン連は、困りきつて、演説を暗あんしょう誦しておこうと努力したが父は面倒くさがつていた。俺おれが、このコップをこうあげたらヒヤヒヤだ、机の此こ処へ手をやったら否いなだ。こういう風になつたら拍手だと教える。だが、やつて見るとノーノーもヒヤヒヤも拍手も入交ぜとなる、何度繰返してもおんなじなので、まあいいやということになつてしまった。今の言葉ならばそれが自然だということだつたらうが――

聴衆は表の通り一ぱいの黒山だった。解わかつたのか解らないのか、ともかくとてもおめでたい事という概念と、はちきれるほど一ぱいなお祭り気分で、ノーノー、ヒヤヒヤ、拍手かっさい喝采、何もかもメチャクチャに景気よく、弁士を胴上げにして家まで送って持って来た。そのあとが馬場勝一派ばばかつの長唄ながうた——馬場は浅草橋の橋手前、其処そこに住む杵屋勝三郎きねやといった長唄三味線の名人、夜一夜唄うにまかせ、狂うにまかせ、市中は明るい不眠症にかかつて、そこら中で花瓦斯はなガスが燃え酒樽あが空いた。雪をこねかえした泥濘ぬかるみに、お酒にお腹なかの袋を破つた死人がゴロゴロ転がった。

多分戸を閉めないで寝た家が多かつたらう。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大丸呉服店

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>